

---

# 僕の好きな人

所有蛇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の好きな人

### 【Nコード】

N8733C

### 【作者名】

所有蛇

### 【あらすじ】

三人の女の子と僕のラブコメっぽいお話です

## あらすじ（前書き）

えゝ、前作を読んでくださった皆様、申し訳ありませんでした。ちよつとしたトラブルでもう一度二話目と部分部分を変えて投稿していきますのでよろしくお願いします。

そして、これから読んでくださる皆様は楽しんでいただけると嬉しいです。

## あらずじ

僕には好きな人がいる。

一人目は成績優秀、学校でも一番モテる、そしてスポーツもできる、そんな凄い人だ。

二人目は少し内気で運動は駄目だけど優しい心を持っている。

そして三人目、彼女は僕の幼馴染みである、財閥の娘さんでもありモデルでもある、今は引越してしまつて何処にいるかは分からないがとても明るい娘だった。

そんな素晴らしい女の子達に対して僕は成績も普通だし、顔も酷くはないが良くはない、何よりチビで喧嘩もあまり好まない、そんな内気な僕と彼女達のお話です。

## 第一話

今日は大切な日だ。

新学期、それは誰と一緒にになるかがわかる大切な日だ。

今日、僕は中学二年生になる。

「今年は誰と一緒にになるかな」

下駄箱の所にクラスわけが書いてあるはずなので見に行く。

「最悪だ、なぜ涼杉さんと同じクラスじゃないんだ」

と絶望するもの有り。

「よっし、涼杉さんと同じクラスだ」

と喜ぶもの有り。

そつ、どこの学校にも必ずいるアイドル的存在、それが涼杉 空さ  
ん。

学校の男子のほとんどが惚れている。

まあ僕もその一人だが…。

彼女は女子にも人気があり女の子からも告白されたこともあるとか  
…。

今まで男子六十七人女子四人が告白したが、彼女は七十一回ごめん  
なさいと答えた。

クラス表に自分の名前を見つけ何組か確認し自分のクラスに向かう。

そんな時に校門にリムジンが止まる。

運転手がドアの方にまわりドアを開ける。

「うわ、すげえ車」

「そんなことより、凄く可愛くない？」

などと言う話しが聞えてくるほど可愛いらしい少女は校舎を見る。

「ここが白夜が通う学校ね」

自分の教室に入ると知っている顔がちらほらと見えた。

その中に涼杉さんを見つけた

「また同じクラスだね、涼杉さん、またよろしく」

「あ、月裏君、よろしく。前のクラスの時は話したかったけどあんまり話せなかったね、でも今度からは見掛けたら声かけてね？」

「あ、うん、分かった、涼杉さんも声かけてね」

嬉しい申し出に承諾する。

「あ、涼杉さん、俺も声かけるから声かけてね」

「抜け駆けすんなよ、俺にも声かけてね」

俺にも、俺にも、と群がって来て危なく潰されそうになった。

「あの、月裏君、また一緒のクラスだね、その、よ、よろしく」

おどおどと話し掛けてくる、こんな話方をするのは、

「うん、よろしくね、海さん」

彼女は海 美咲さん、僕以外の男子とはあまり話さない少し内気な人。

内気な所が守ってあげたくていいと好きになる奴も多い。

「涼杉さんは相変わらず人気だね」

「うん、海さんも相変わらず人気で」

後ろでチラチラ海さんを見ている男共を見ながら言う。

「え？それってどういう意味？」

と海さんと話しているとドアが開き先生が入って来た。

「はい、席について。えゝと、さっそくですけど転校生を紹介します。入って来て」

## 第二話

転校生か。

新学期に合わせて転校してくるのはよくある話だ。  
どんな人なんだろう。

「入って来なさい」

先生が転校生を呼んだ。

ガラッ、という音がしてドアが開く。

皆が一斉にそちらを向き動きが止まった。

物凄く綺麗なのだ。

皆が

「あんな美少女初めて見た」

とか

「涼杉さんといい勝負じゃない？」

などと言っている。

しかし、白夜には、白夜にだけは見覚えがあった。綺麗な髪に整った顔、小さい頃よく遊んだ仲なのだ。

「初めまして、天上<sup>てんじょう</sup> 美菜<sup>みな</sup>です。よろしく」

ニコツと笑う。

男子がはう、とか言って倒れる

「モデルもやっているのだから時々来れないかも知れないけど仲良くしてね」

と、言った。

「モデルだって」

「だから綺麗なんだ」

と言う話が聞こえて来た。

そんな中、美菜が教室を見回していると白夜と目があった。

「白夜久しぶりね」

皆の前で大声で僕の名前を呼ぶ。「み、美菜？なんでここにいるの

「戻って来れないって言ってなかった？」

意味が分からない。

「なんだ月裏知り合いか、なら天上の席は月裏の隣りでいいな」  
担任がそんなことを言う。

「そんな、ちよつと」

反対しようとしたが、

「それじゃ、HRは終わり、しつかりと授業を受けるように」

と僕の話も聞かず先生は出ていってしまった。

その後結局授業が始まったので、美菜への質問が途中になっている。  
一時間目が終わるとすぐに美菜に質問した。

「なんでこっちにいるの？おじさん達は一緒に帰ってきてるの？」

「何よ、いきなり帰って来て驚かそうと思ってたのに、なんでこっちにいるのって帰って来ちゃ駄目だった？」

「そうじゃないよ、いきなりだったから驚いただけ」

「そう、ならいいけど、私今日から白夜の家に一緒に住むから」

「「えー！」」

僕よりも先に周りで聞き耳をたてていた、クラスメートが叫んだ。

「何で月裏くんの家に住むの？まさか許嫁とか」

「月裏どういうことだ！何でお前がこんな可愛いこと一緒に暮らすんだよ！」

白夜は男子に美菜は女子に言いよられた、その後ろで海と涼杉は浮かない顔をしていた。

とりあえず、周りは置いて美菜への質問を再開する

「な、なんで美菜が僕ん家に住むの？おじさん達は？」

「お父さん達は来てないわ、お父さん達とは別々に暮らすって事になったから」

「だからってなんで僕の家なのさ、一人暮らしでもいいだろ！」

「だって、一緒に暮らした方が白夜と一緒にいられる時間が増えるじゃない」



「っ」真直ぐな言葉に言葉を失う

「白夜に会いにお父さん達とは別々に暮らそうと思つて来たのにそんな言い方ないじゃん！せっかく会いに来たのに…」

皆の冷たい目が僕に集まる

「あの、その、そう、ただいきなりだったから驚いただけで別に嫌とかじゃなくて」

「じゃあ、いいわね、私今日から白夜の家に住むから」

「…分かったよ」

「やった！流石白夜話が分かる」

そんなこんなで美菜は僕の家に住むことになった。

そんな白夜達の後ろで暗い顔をした海には気付かずに…。

### 第三話

放課後になると美菜が

「早く帰ろう。荷物も届いてるはずだしおば様達にも会いたいし」  
うちに住むことが決まってから美菜は上機嫌である。

そんな美菜には言いたくなかったがやつぱり言うしかない。

「母さん達はいないよ、死んじゃったんだ…美菜が引っ越した後交通事故で…」

美菜の笑顔が消えて、焦った感じになる。

「じよ、冗談でしょ？」

「僕がそんな嘘つくと思う？」

美菜の笑顔が消える。

「だから、うちで住むなら僕と二人きりになっちゃうけど美菜はそれでもいい？」

「私はいいけど…白夜は大丈夫なの？私と二人きりで」

「さっき言っただろ？いいんだよ、二人で暮らそう。そっちの方が僕も淋しくないし」

「…そうだね。私がいれば白夜も淋しくないよね」

美菜は無理に笑った。

家について美菜の荷物の整理を手伝い夕飯を作ろうとすると

「あ、白夜はいいよ。私を作るから」

「え？美菜ご飯作れるの？」

「失礼ね！ご飯ぐらい作れるわよ！」

と言って出て行った。

数分して心配で見に行ったら、けっこううまくいっているようで、いい匂いがしてきた。

「あ、白夜、もうすぐ出来るからもう少し待ってて」

僕に気付いた美菜が言った。

「何かすることない？運ぶものとか」

「いいよ、私が運ぶから、白夜はテレビでも見てて」と言われたのでニュースを見ていると…

「今日〇×市で婦女暴行事件がありました。最近多発しているので皆様御気をつけください」

「×市って言ったら近くじゃん」

「最近この辺りで強姦の事件がよくあるけど同一犯なのかな？」調理を終えた美菜が食事を運びながら言った。

「同一犯みたいだよ、手口も一緒らしいし、被害者もこの辺りの中高生だしね」

「やだな、早く捕まらないかな」

「警察が総動員で捜査してるらしいからすぐ捕まるよ」

「うーん、それもそうね」

美菜が作ってくれた料理も運び終えたので、いつの間にか運びこまれてきた机と椅子に座り食べ始めた。

「ご馳走さまでした」

食事を終え、美菜は後片付けを始めようとした。

「いいよ美菜、僕がやるから」

「料理もしたんだから後片付けもやるわよ」

「美菜にばっかやらせちゃ悪いし、それに水仕事して美菜の手が荒れちゃったら大変だろ？」

「そんな…綺麗な手だなんて、分かった、後片付けは白夜に任せるわ」と頬を染めながら言った。

綺麗な手なんて言っていないんだけどな…。

## 第四話

美菜が僕の家に泊まっているのは朝にはもう学校中に広がっているように僕と美菜を見てヒソヒソと話をしている。

僕が教室に入るなりクラスメートから

「新婚さんいらっしやあい」

と、某テレビ番組のセリフでからかわれた。

「先生が来るから、みんな冷やかすのはいい加減やめて席について」  
委員長の涼杉さんがみんなに言った。

涼杉さんの言うことを無視する者はいないのでみんなおとなしく席に着いた。

「ありがとう、涼杉さん、助かったよ」

「私は自分の仕事をしただけ」

と冷たく言われてしまった。

「つ、月裏君」

席につこうとしたら海さんが話かけてきた

「ほ、本当に天上さんと一緒に住んでるの？」

潤ませた目で見上げて来る。

「うん、一応一緒に住んでるけど、それがなに？」

「一緒に住まなきゃ駄目なの？」

「駄目ってわけじゃないんだけど、美菜が僕の家じゃなきゃだつて駄々こねて仕方なく」

「でも、若い男女が一つ屋根の下に二人っきりって言うのはまずくないですか？」

「うーん、それはそうなんだけど、美菜がいると家事は楽になるから迷惑でわないしね」

と言った。

「迷惑じゃないならいいんですけど、二人っきりだからって変なことしちゃだめですよ」

と言って海さんは席についた。  
変な事ってなんだろう？

昼休み僕は親友の鹿賀里木 秋羅（かがりき あきら）と昼ご飯を食べていた、すると美菜と海さんが一緒に食べたいと入ってきた。「いやあゝ、こんな美少女二人と一緒に飯が食えるなんて光栄だな」と大声で言いながら僕の背中をバンバンと叩いてきた。

「んで、白夜はどっちが本命なんだ？」

飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになり慌てて飲み込む。

「な、何馬鹿なこと言ってるんだよ！どっちが本命とかないから！」

大声で否定してしまったので周りのみんながびっくりした顔で見てくる。

「そんな大声で否定したらバレバレだぞ？」

秋羅はニヤニヤしながら言った。

「んで？どっちが本命だ？ん？ん？」

オヤジみたいな奴だ。

「だからどっちが本命とかないってば」

「つまりどっちも狙ってるってわけか」

「……」

もう言葉もでない。

「お前って優柔不断だな」

「なんでそうなる！お前意味わかんねえぞ」

「凶星だからってキレんなよ」

「キ、キレてないっすよ？」

「……」

みんなの視線がいたい。

「笑いのセンスねえな、お前」

「分かってるよそんなこと」

秋羅が急に海さんと美菜に背中をむけて僕の肩に腕をかける

「んで、天上さんとはもうキスはしたのか？それとももうやっちま

ったのか？そこにとどうなんだよ？」

嫌な友達である。

「んなことするわけねえだろ？」

「え？してないの？」

いかにも意外そうに言った。

「なんでそんな意外そうに言ってるんだよ」

「いや、普通やつちゃうだろ？こんな可愛い娘と一緒にすんでりゃ当然のように言うな。」

「そんな普通は知らん。てか彼女でもないのに」

「彼女になつたらやるのかよ？」

「…ヤらない」

「玉無し？」

「…」

玉無しかもしれない。

「冗談はさておきそろそろ授業始まるし片付けようぜ」

「そうだな」

秋羅がそう言ったので片付け始める。

「きゃっ」

僕の手が海さんの手に触れた。

「ご、ごめん」

「い、いえ私こそ」

僕も海さんも顔が真っ赤になって見つめあっている。  
海さんにいたっては上目づかいである。

「そういうラブコメはよそでやってくれねえか？」

秋羅の声で我に戻る。

「ラブラブですな」

秋羅が言う。

「ラブラブね」

美菜が怒って言う。

「ラブラブじゃないよ」

「ラブラブじゃないです」

海さんと僕のセリフが被る。

「息ぴったり、いいカップルに成りそうだね、あ、ごめん、もうカップルだった？」

秋羅がニヤけて言う。

「まだ付き合ってないって！」

僕が叫んだ。

何故か海さんが顔を赤くする。

美菜は機嫌が悪そうに僕を睨みつけてくる。

「まだってことはいつか付き合っただな？」

秋羅がいつそう楽しそうに言う。

「言い間違えただけだよ」

その時、僕は海さんが少し哀しそうな顔をしたのに気がつかなかった。

## 第五話

今日の放課後、五時に教室に来てください。  
海。

そう書かれた手紙がいつの間にか机の中に入っていた。

「僕に何の用だろう？教室って僕らのクラスの教室でいいんだよね？」

鈍感な主人公ですいません。

鈍感な主人公は首をひねりながら自分のクラスに向かう。

ガラッ

扉が開く音が響く誰もいない廊下。

「ごめんね、急に呼び出しちゃって」

「別にいいよ、それで僕に何の用？」

少し躊躇して、それから話出す。

「私：私月裏君のことが好きなの」

突然の告白。

考えもしなかった展開に動揺する。

「え、あのその…え？海さんが僕のこと？」

はい、とうなずく。

「で、でも、なんで？僕海さんに何もしてないよ」

「何にもしてたくないよ。月裏君は私に大切なものをくれた。」

…覚えがない。

「ごめん、僕、覚えてないんだけど、海さんに何かしてあげた？」

「覚えてないかもね：あの時私は泣いていたから」

ぼんやりと浮かんで来た映像。

「もういいよ、見つからないって」

と、泣いている女の子と何かを一生懸命に探す僕。

あたりはもう夜と言っていいほど暗い、草の中などほとんど見えな



い、それでも探し続ける。

もう見えなくなる、もう無理だ、女の子がそんな風にいつそう泣き出した時、僕は何かを引っ張りだした。

僕の手はハート型のペンダントを握って女の子に近付く。

それを女の子に見せる。女の子は泣き過ぎで赤くなつた目をあげて嬉しそうに微笑んだ。

ベンチに座ってありがとう、と何度も呟いて泣き出した。

泣き付かれたのか僕の肩に顔をのせて幸せそうに眠っている。

僕は女の子の親が来るまでずっと一緒にいてあげた。

そして別れ際その時の僕には死んだ親の形見の意味はよく分からず、親が死ぬ前に買ってくれた指輪をあげた。

「あの時僕がペンダントを見つけてあげた、あの娘？」

「覚えててくれたんだ」

「うん…いや、忘れてた」

「あの日から私は諦めないことを学んだ。月裏君をみつけたのは中学に入ってからだけど見た時すぐ分かった、ああ、あの人だって、だからすぐに声をかけました。」

そういえば、中学に入ってから初めて話したのは海さんだった。

「それからすぐ告白しようと思ったんですけど、月裏君、涼杉さんのこと好きみたいだったから…」

「それは…」

「…返事は今じゃなくていいですから、それじゃ」

と言って出て行こうとした。しかし、ドアを開けようとした時に廊下側から開いた。

そこには美菜と涼杉がいた。

あの後海さんは

「失礼します」

と言って逃げる様にと言うより逃げて帰ってしまった。

涼杉さんは

「イチヤイチヤするのは他の場所にしてください」  
と言って行ってしまった。

美菜は

「帰りましょう」

と言ってさっさと教室をでて行ってしまった。

そして、今美菜と一緒に帰っている。僕は何も言えず、美菜は何も言わない。

沈黙がどれほど続いただろうか。

「白夜はあの女が好きなの？」

突然美菜が僕に言った。

「いや、その好きは好きだけど、その…他にも好きな人がいるから」と美菜を見ながら言う。

「だから、そのまだ誰が好きとかじゃなくて、その」

「もういいよ、分かったから」

と少し淋しそうに言った。

夜、九時を回った所、空は電話をかけている。

「もしもし？空？どうしたの？」

「あ、美沙？あの相談があるんだけどいい？」

「いいよ、お姉さんに任せなさい」

「あのさ、今日、ある男子が女子に告白されたのを見ちゃったんだけど、それからなんかイライラするんだけど何でかな？」

「え？何何、誰が誰に告白したの？」

「いいから、質問に答えてよ」

「…そうね、好きなんじゃないのその男子のこと」

「え？」

「ねえ、ますます気になってきた、誰よ男子の方だけでいいから教えてよ」

「そっか、私月裏君が好きなんだ」

美沙の事を完璧に無視している。

「ねえ、ちよつと聞いて」

ガチャン！

完璧に自分の世界に入っている空は電話を切った。

## 第六話

次の日、僕は美菜に引きずられて登校した。

「待って、まだ心の準備が」

「暴れないで！昨日言ったことをそのまま言えばそれで終わりよ」

「でも、どんな顔して海さんと会ったよ」

「いつも通りでいいの」

そんな会話をしている内に教室に着いた。

「いい？教室に入っても普通にしてるのよ？普通に」

と言って、ドアを開けた。

そして僕を突き飛ばして無理矢理教室に入れた。

倒れそうになったのをなんとか踏ん張って顔をあげると、そこに海さんがいた。

ボソツ、僕と海さんの顔が真っ赤になり、湯気が出ている。

「あ、あの、お、おはよう、ござ、います、つ、月、月裏君」

「う、うん、お、おはよう、…う、海さん」

何かあったのはバレバレである。

まわりでヒソヒソと話す声が聞こえる。

「ねえ、海さんと月裏君何かあったのかな？」

「どう見ても何かあっただろ、見ろよ、湯気たってるぜ」

みんなにバレてるのが本人にも分かった様で二人ともあう言つて困っていた。

「ねえ、もしかして昨日言ってた男子と女子って」

「違うよ、海さんと月裏君じゃないよ」

慌てて否定する。

「は？何言ってるの？いぬがみ狗神ともぎ茂紀のことじゃないの？昨日はそうじゃなかったのに何かイチャイチャしてるし」

確かにドアの付近にいる人間を差し置き、窓側の席でイチヤイチヤしている狗神と茂紀がいた。

「あ、そうみたいだね。狗神君と茂紀さん付き合い始めたみたいだね」

「ま、美咲と月裏に何かあったのは分かったけどまさか告白してるとは、それに空が好きなのがまさか月裏だったとはねえ」

「いや、それは」

「違うと言おうと思った。」

しかしそれは美沙が許さない。

「違うんでしょ？違うから美咲と月裏の話が出たんでしょ？」

「……………」

言いわけ出来ない。

「ま、頑張んな、空なら絶対にうまくいくよ」

「上手く、ね」

もし月裏君が海さんのこと好きじゃなくとも天上さんのことが好きかも知れない。

そう思うと不安な気持ちは消えなかった。

いつまでもあうあう言っていてもしようがない、と思ひ僕は

「あの、昨日のことなんだけど、放課後に」

と言った。

海さんは

「わ、分かりました、それじゃ」

と言って行ってしまった。

「昨日のことって何かな？」

「さあ？デートでもして告られたんじゃない？」

このクラスは白夜と海、空をのぞくと大体の奴が勘が鋭いようだ。

「バレちゃってるみたいだけどいいの？」

美菜が聞く。

「…なんでみんなこんなに勘がいいんだよ」

と僕は嘆く。

「白夜が鈍いだけよ」

と冷たく言われてしまった。

## 第七話

放課後になり、みんなが帰らない。

朝の話を聞いていた奴等が興味津々というように残っている。

仕方なく僕が教室を出ると海さんが教室にいないのを確認し僕の後を追う。

どうしてみんなこんなに人の恋愛などを気にするのだろう。

ちなみに僕は今図書室に向かっている。

しかし海さんが待っているわけではない。

ただ後ろの野次馬をまくためだ。

図書室にはたくさんの本棚がある。

それは身を隠すのにむいている。

と追いかけて来る奴等を無視して図書室に入るとすぐに奥の棚に向かった。

そこで、棚を影にして逃げる予定だったのだが、しかし、

「きゃっ」

そこに海さんがいてぶつかってしまった。

「危ない」

倒れそうになった海さんを腕を掴んで引き寄せる。

強く引つ張り過ぎて僕も一緒に倒れてしまった。

そこに僕を追ってきたクラスの奴等が走りこんで来た。  
状況説明。

誰もいない図書室の奥。

重なりあう男女の身体。

間違いなく勘違いされている。

追ってきたクラスの奴等が僕達を見て硬直している。

海さんはみんなの視線に気付き、

「きゃっ」

などと言って僕から離れた。

それじゃあ、なんかいやらしい事をしてたみたいに見えちゃうじゃん。

案の定みんな顔を赤くして声を揃えて

「『こんなところで、何してんだ、テメエら！！！！』」

と叫んだ。

図書室にいた関係のない人達は注意しようにも、クラスの奴等の怒気に触れそうであきらまっている。

「おい、月裏、テメエこんなところで海さんと何してた！女の子に興味なさそうな面しやがって、実は興味津々か！？羞恥プレイですか？彼女の中は温かかったのか？どうなんだよ、月裏ああああ」

と男子は僕の胸倉を掴む揺する。

「海さんは月裏君と付き合ってるの？てか付き合ってもこんなとこでなんて駄目だよ」

と女子は海さんを説得(?)している。

海さんはキョトンとしている。

僕が言い訳しても意味がないし、勘違いが拡大する可能性がある、だから、僕がとるべき行動は…。

僕は海さんの手を握り、

「逃げるよ」

と声をかけ、走る。

海さんは一瞬びっくりしたようだが僕が走り出したのを見て即座に反応して一緒に走って来てくれた。

僕は海さんの手を握り走る。

あれから、クラスの奴等が追いかけてきたがどうにかまくことが出来た僕と海さんは屋上に来た。

「あの、手」

海さんの手を握ったままにしていた。

「う、ごめん！」

慌てて手を放す。



少し沈黙が続き耐えきれなくなつた僕が話し始めた。  
「あの、昨日のことなんだけど…」

## 第八話

「あの、昨日のことなんだけど…、僕、その、好きな一人に決めなくて、海さんのことは好きなんだけど、その、僕が誰かと付き合えるほどしつかりしてないから、だから、待って欲しいんだ、僕が誰か一人に決められたら、もう一度返事したいんだ」

「…それって、ずるい、私はキープしてもいなくなったら、ばい、ですか？」

「いや、そういう事じゃなくて」

「分かってますよ、意地悪なこと言ってるのも、でも、今私と付き合えるか聞きたいんです」

「…」

それは、どうなのだろう、付き合おうと思えば付き合える、けどそれは美菜を、涼杉さんを好きじゃいけない。

そして何より海さんを傷つける。

だから、

「ごめん、今海さんとは付き合えない」

僕ははつきりと言った。

「…そう、ですか」

海さんは泣き出す。

僕は海さんを抱き寄せる。

「ごめん、ごめんね」

「謝らないで、惨めになるだけだから、謝らないで」

海さんは泣き続けた。

泣きやんだ、海さんは、

「私、諦めませんから、絶対、負けません、誰よりも月裏君にアプローチしていきますから」

と言って去って行った。

「これまた大変だ」  
僕は空を見ながら言った。

家に帰ると美菜が玄関で待っていた。

「お帰り、白夜」

と普通に言う。

「ただいま」

と僕も普通に言う。

「それで、どうなったの？」

どうなったの？とは多分告白の返事のことだろう。

「うん…、断ったよ、でも、諦めないって言われた」

少しどう答えるか迷い、こう答えた。

「そう、でも、私も負けないわ」

と少し嬉しそうに、楽しそうに言った。

「じゃ、ご飯にしよう」

と言ってリビングに入って言った。

こうして僕の告白騒動は終わった。

次の日、朝教室に入るとみんながいつせいに僕を見た。

秋羅が近付いて来て肩に手をまわす。

「白夜君、ちょっとこっちに来てくれないかな？」

何か怒っているようだ。

「何怒ってんだよ」

「怒ってねえよ、たださ親友にも海と何があったか話さないわけ

？それはどうなのかな？絶交宣言？」

海さんのことだから怒っているらしい。

そういえば、ちょっと前に海さんのこと好きだとか言ってたような

…。

「ん？どうした？なんかあったのか？言ってみ？」

「あつと、その、これは個人情報保護法に引っ掛かるから話せない」

「そんな物知るか！話せ話せ話せえ！」

胸倉を掴んでガクガクとふる。

「話す、話すから、話すから放せ」

と言うと手を放した。

手が放れた瞬間逃げるように（いや実際逃げるんだが）教室から出ようとしたのだが、ドアを開けたところにタイミング悪く、海さんがいた。

海さんは僕を見て顔を赤くして

「あ、お、おはようございます」

と言った。

「あ、うん、お、おはよう」

と言った。

「その、昨日のことは内緒にお願いします、美菜さんだけには言っても構いませんから」

「内緒ね…分かった」

「白夜君、昨日の事って何の事だこの野郎！あれか、十八歳以下閲覧禁止か？」

だんだんウザくなってきた。

「ウザい消えろ、お前には関係ないだろ」

僕がそう言つと海さんも

「そうです、秋羅君には関係ないです」

と同意した。

ガーンと言う効果音が似合うほど落ち込み何処かに行ってしまった。

「あの、月裏君、こ、今度の日曜日暇ですか？」

秋羅が消えてから海さんが聞いて来た。

「え？暇だけどなんで？」

「その、一緒に映画を見に行きませんか」

そういう事か、昨日の宣言通りアプローチして来た。

「迷惑でしたか？」

「いや、そんなことは」

「じゃ、行きましょうか」

…何か海さん強くなった気がする。

「それじゃ、後でメールします」

「メアド知ってるの？」

「…知りませんでした」

海さんとメアドを交換して先生が入って来てホームルームを始めた。

昼休み僕は屋上で秋羅を含む男子多数に囲まれていた。

「月裏、海さんとの関係を全て話して貰おうか」

顔が引きつりながら言う。

「関係って何さ」

「何があつたか、何をしたか、どうしてそうなったかを包み隠さず  
言え！」

ここは嘘について誤魔化した方がいいだろう。

「実は…僕、海さんと付き合ってるんだ」

「「「………」」」

…黙っちゃったよ。

その先はどうでも良くなったのか、もう聞きたくないのか某ゲーム  
に出て来るゾンビの様に屋上から降りて行く。

## 第九話

空は昼休みは大抵屋上に行き一人でご飯を食べる。けれど今日はそうはいかなかった。

男子が沢山いた。

その中に白夜の姿を見つけた。

何か話しているのが聞こえた。

「月裏、海さんとの関係を全て話して貰おうか」

月裏君に質問しているようだ。

「関係って何さ」

白夜は誤魔化した。

「何があつたか、何をしたか、どうしてそうなつたかをすべて包み隠さず言え！」

男子のリーダー的な人がそう怒鳴った。

確かに月裏君と海さんの関係は気になるけど…聞きたくない、もしも月裏君と海さんが付き合ってたなら、私は…。

「実は…僕、海さんと付き合ってるんだ」

場が氷つく。

男達はショックが隠せずその後の話も聞かず、屋上から出て来た。

空は扉のすぐ横に居たのだが皆ショックで周りの様子など眼に写らない様だ。

少しの間そこから動けずにいる。

そして決心を決めて屋上に出る。

男子連中が消えてから空を眺めていると、後ろから、

「月裏君」

と声をかけられた。

驚いて振り向いてみれば涼杉さんがいた。

「……さっき、聞いたやつただけ、海さんと付き合ってるの？」

さつきと言つのは男子との会話の事だろう。

だとしたら…。

「…いや、海さんと付き合ってるわけじゃないよ。ただアイツ等がウザかったから変につきまとわれても嫌だから言っただけ」

「本当に？」

更に涼杉さんは聞いて来る。

「本当だよ。今嘘ついてもしようがないでしょ？」

「じゃあ、私が月裏君と付き合いたいって言ってもいいのね？」

海は白夜に弁当を作つて来ていた。

しかし昼休みになつてすぐ、男子複数名により、拉致（？）された。少し白夜を探していると、白夜を拉致（？）した男子達が屋上から降りて来て、海を見て泣きながらさつて行つた。

月裏君がいない？

男子と一緒に戻つて来るだろうと思ひ待っていたのだが白夜が降りてこない。

どうしたんだろう、まさか乱暴されたんじゃ。

急いで階段を駆け上がる。

ドアを開けようとすると話声が聞こえて来た。

「……さつき、聞いちゃったんだけど、海さんと付き合ってるの？」  
さつきと言つのは男子と月裏君の会話の事だろうか？

「…いや、海さんと付き合ってるわけじゃないよ。ただアイツ等がウザかったから変につきまとわれても嫌だから言っただけ」

「本当に？」

更に涼杉さんは聞いている。

「本当だよ。今嘘ついてもしようがないでしょ？」

「じゃあ、私が月裏君と付き合いたいって言ってもいいのね？」

パンツ。

凄まじい音でドアが開いて海さんが入って来た。

「駄目です！月裏君は私と付き合ってますから、駄目なんです」  
海さんが叫んだ。

突然入って来た海さんに面を食らった涼杉さんが言った。

「月裏君、海さんと付き合ってるわ」

「……」

涼杉の中で僕と海さんが付き合ってる事が肯定された。

「あ、違う違う、月裏君は海さんと付き合ってるの？って言いたかったの、突然で間違えちゃった」

説明しちゃった。

言い直されれば気付くけど。

「僕と海さんは付き合ってたな」

「付き合ってます！」

僕がないと言おうとしたのを書き消した。

「今は月裏君に聞いているの」

「月裏君が答える必要はありません、私と月裏君と付き合ってます」  
海さんと涼杉さんとの間で火花が散る。

「海さん」

僕は海さんに呼び掛ける。

「今海さんがやってることはフェアじゃない、だから、本当のことを言おう？」

優しく言う。

「……」

しばらくムスツとした顔をしていたが、最後には

「確かに私と月裏君は付き合ってますんでも……」

胸をはって言う。

「負けませんから」

それに対して涼杉さんは

「私だって負けないわ」



と言っ  
た。

## 第十話

海さんが涼杉さんに戦線布告（？）した翌日。

「月裏君」

涼杉さんに声をかけられた。

「何？」

「今週の日曜日映画を見に行かない？」

デートのお誘いでした。

「えっと、今週は海さんと映画を見に行くことになって」

海さんの名前が出た瞬間にピキッという効果音が似合うほど涼杉さんの顔が引きつる。

「そう、海さんとね…だったら月裏君は私とも映画を見に行ってくれるわよね？」

？よりも怒りマークが似合う言い方で言った。

「え、その…」

「何？海さんとは行けて私とは行けないと？」

行くことを強制する言い方だ。

「行ってくれるわよね？」

「…はい」

こうして来週の日曜日の予定も決まった。

そして日曜日が来た。

見る映画は海さんと映画館であつたその時に決めることにしていた。約束の時間十分前に映画館に着いた。

海さんはまだ来ていない様だ。

そして約束の時間五分前になった頃、海さんが来た。

「ご、ごめんなさい、誘つておいて待たせちゃうなんて」

「いや、僕も今来た所だから気にしないで」

「それで今日は何を見る？」

「は、はい、良ければ『出会いの春』と言う映画を見たいのですが」  
『出会いの春』とは最近話題になっている、恋愛映画の一つだ。  
「うん、それじゃ、それにしようか」

と言って僕達は映画館に入った。

「……」

「……」

映画が終わって泣くむ二人が映画館から出て来た。

「晶さんがあそこで亡くなってしまっなんて」

「取り残された春菜さんがまた健気で」映画のシーンを思い出し  
また泣くむ二人。

泣く事十分。

「それじゃ、これで、今日はありがとうございました」

「うん、僕も楽しかったよそれじゃ」

と言って別れた。

次の週の日曜日。

「白夜、今日どっか行こうよ」

美菜が暇でしようがないと言う風に寄り掛かってくる。

「ごめん、今日は涼杉さんと映画を見る約束があるから」

美菜は不機嫌そうに言う。

「映画？こないだも見に行ってたじゃない？」

「この間は海さんとで」

「涼杉？海？誰よそれ？」

美菜の目が細くなる。

「誰って、同じクラスでだよ？」

「私クラスの人の名前白夜以外知らないから」

ふてくされた様子で言う。

「早く覚えてあげなよ」

「来週は誰と行くの？」

僕の言葉を完全に無視する。

「来週は別に誰とも約束してないけど」

「じゃあ、私とデートしよう」

海さんや涼杉さんに対抗する様に言う。

「…分かった、でも何するの？」

「映画見に行こう」

「…」

三周連続で映画ですか？

「いや、ちよつと三周連続で映画は」

「…ふ〜ん、海や涼杉とは行けて私とは行けないと？」

「…」

涼杉さんと映画を見に行く約束をさせられた時に似ている有無を言わせない言い方だ。

「…分かったよ」

ため息をつきながら言う。

「やった！」

こうしてまた来週の予定が決定した。

あの後嬉しそうに鼻歌を歌っていた美菜に

「じゃ、行ってくるから」

と言って家を出た。

「あ、こら、白夜！待ちなさい」

出て行った僕に氣付いて美菜が叫ぶ。

「これ以上待ってたら涼杉さん待たせちゃうから話はまた後でな」

と言って全速力で走る。

全速力で走ったので何とか時間には間に合った。

「ふう、一応約束の時間には間に合ったけど、涼杉さんはどこかな？」

涼杉さんを探して周りを見渡す。

「あ、いた」

「なあ、いいじゃねえか、彼女？」

「俺らと遊ぼうぜ？」

男二人に言い寄られていた。

「だから、さっきから言ってるでしょ？人を待ってるの」

「さっきから待ってるけど来る気配が無いじゃん」

男の一人が言う。

「まだ約束の時間じゃない」

と言いはる。

「いいから行こうぜ」

と男が涼杉さんの腕を掴む。

「涼杉さん！」

やばい、と思った僕は涼杉さんに駆け寄った。

「んだ？このチビ」

僕を見下ろして言う。

「ほら、ちゃんと来たんだから手放しなさいよ」

涼杉さんが苛立った様に言う。

「お前が待ってたのってこれ？」

「見るからに弱そうだな、彼女お？こいつじゃ守って貰え無いぜ？」

こんな風になあ」

わざとらしく涼杉さんの腕を引く。

「痛っ」

涼杉さんが小さな悲鳴をあげる。

「放せよ」

男二人が誰の声だと言う風に周りを見回す。

「放せて言ってたんだよ？聞こえねえか？」

ようやく誰が話しているのか分かったようで少しびくりした目で僕を見る。

少しして

「放せよって言ったかよ？」

男は今にも笑い出しそうになりながら言う。

「耳がわるいの？難聴？」

僕の言い方が気に食わなかった様で笑顔が消える。

「ちょ、ちよつと、月裏君」

涼杉さんが止めに入る。

「大丈夫、僕は強いから」

ニコツと笑ってみせる。

「お前俺等のバック誰だか分かってんかよ？」

「鮫又党だぜ？」

鮫又党とはこの辺りで有名な族だ。

「へえ、鮫又党ねえ、頭誰か知ってる？」

白夜が聞く。

「はあ？決まってるんだろ鮫宮さんだよ」

「いや、鮫宮さんは頭じゃねえよ、なんか、本当は違う奴が頭なんだが変わりにやってるらしいぜ」

二人がそんなことを話している。

本来は誰が頭なのか知らないらしい。

「実はその頭が僕」

笑って言う。

「……はあ？テメエみたいな餓鬼が鮫又党の頭だあ？」

「ふかしこくならもつとましな可言えよ」

ありえないと笑う。

僕は携帯を取り出して電話をかける。

「あ、鮫宮？ご無沙汰、あのさ、ちよつとチンピラにからまれちゃったんだけど助けてくんない？映画館の前にいるから」

と言って電話を切る。

二人が笑うのをやめる。

「さ、鮫宮さんのわけねえ！はったりだろ？」

そこにバイクの音が聞こえて来る。

ボボボボボ、少し五月蠅いマフラー音のバイクが止まる。

「ブラツクのゼファー750の絞りハン？じよ、冗談だろ？」

バイクに乗っていた男が近寄って来る。

パツと見ただけでもデカいと分かる男が白夜の前で止まる。

「お久し振りです、白夜さん」

「おう、どうよ？最近は」

「はい、党はかなりデカくなって来てます、それよか、白夜さんに絡んでるチンピラは？」

周りをキョロキョロとする。

「こいつらだよ」

自分の前にいる男二人を指す。

「こいつら確かウチで面倒見てやってる奴等です、すんません、白夜さん」

「おお、気にすんな、ちゃんと仕付けとけよ？それからテメエらよ  
お」

二人はビクツとして震えだした。

「ナンパをすんなとは言わねえ、でもよお、人の女に手え出すなよ？分かったんかよ？テメエら」

二人は黙ってうなづく。

「鮫宮、これから党のこと頼むぜ？」

それだけ言つと白夜は涼杉を連れて映画館に入って行く。

## 第十一話

僕と涼杉さんが映画館に入ると涼杉さんが僕に言った。

「月裏君って本当に暴走族の総長なの？」

「あの話は本当だよ」

今度は笑わずに言う。

「なんで月裏君が暴走族の総長に？」

「親が死んだ後僕は喧嘩ばかりしてた時期があったんだ、その時に色々あつて暴走族の総長になった」

「ぼかしたのは言いたくなかったからだ。」

「みんなには知られたくないから黙っててね？」

「いつもの僕に戻って言う。」

「…分かった」

涼杉さんは少し迷った様だったが約束してくれた。  
雰囲気を変えようと笑顔で、

「で、なんの映画みようか？」

と聞いた。

「…『出会いの春』でどう？」

涼杉さんは少し迷ってそう答えた。

「あの、その映画、先週海さんと見たんだけど…」

「…」

涼杉さんの顔が不機嫌そうに歪む。

「…じゃ、じゃあ、『彼女日記』はどう？」

と僕が提案する。

『彼女日記』は海さんと見た『出会いの春』と同じ最近話題になっている恋愛映画だ。

しかし、涼杉さんは

「いや、ここはあえて『出会いの春』を見ましょう」と言った。



「それはちよつと…一回見たし」

「だからこそよ、海さんと見た時より楽しめたら海さんより私の方が好きと言ふ事よ」

と自信を持って言う。

「それは強引過ぎだと思ふけど…」

「いいから、早く行きましょう」

と言って涼杉さんはチケットを買いに行ってしまった。

映画を見終えて出て来ると涼杉さんは涙を流していた。

「うつゝ、晶さんが、晶さんがあゝ」

と映画のシーンを思い出しよりいつそう泣き出す。

一方、僕の方はやはり一度見てしまったので、そこまで泣く事が出来なかった。

泣き止んだ涼杉さんは

「月裏君は意外と感受性が無いのね」

と言った。

「違うよ、一回見て内容が分かつて泣くに泣けないって言うか…」

「それは単に同じ映画を選んだ私を責めてるの？」

涼杉さんは少し被害妄想がある様だ。

「そうじゃないけど…」

「けど何？」

「ムキになつてゐるよりは自分らしい涼杉さんの方が…その…か、可愛いと思ふよ」

「…そう、そうね。今日の私は私らしく無かった、だから月裏君が楽しく無かったのは当然」

何とか誤魔化せた様だ。

「だから、今度は違う映画を見ましょう」

と言って、映画館に戻って行ってしまった。

結局あの後『彼氏日記』を見た。

「彼氏の行動を日記につけてたおかげでどこにいるか分かった、て言うのはちょっと強引よね」

「そうだね、ちょっと強引過ぎるかな」と言う。

時計を見るともう夜の八時をまわっているので

「もう遅いから送ってくよ」

と僕が言うと、涼杉さんは

「あら、ありがとう、でも、今日はいいわ、二本も付き合わせちゃってごめんなさいね、それじゃ、また明日学校で」と言って走って行ってしまった。

リビング以外明かりの付いていない家に入る。

「お帰り白夜」

と僕が帰って来たのが分かった美奈がリビングから顔をだして言った。

「うん、ただいま」

と返した。

「遅かったね、もうご飯出来てるよ」

と言ってリビングに入って行った。

「ふう、ご馳走さま」

ご飯を食べ終えた僕は食器を台所に持って行きながら、美菜に言った。

「…ねえ、白夜」

家に帰って来てから全く話さなかった美菜が尋ねて来る。

「今日なんで遅くなったの？」

「え？いや、涼杉さんと映画見てたから」

「それにしても遅いじゃない、六時間以上もやる超大作を見てたわけじゃないでしょ？」

「そりゃそうだけど、ただ涼杉さんと二本見ただけだよ」

「私が家で待つてゐるって知ってて？朝の話が途中になっちゃったからご飯食べながら話そうと思って噛み切りにくいものを入れない様にして待つてたんだよ？」

感情が爆発したのか声量が半端じゃ無かった。何と謝ればいいのかの達ろっ…謝罪の言葉が見つからない。

「…ごめん、何て謝ればいいのか分からないけど、僕美菜の気持ちを考えて無かった…ごめん」

「もういいよ…白夜は私の事何とも思っていないみたいだし」  
美菜は寂しそうに言った。

「そんな事無いよ、僕は美菜の事…」  
「私の事、何？」

「美菜の事、す、好きだから」  
顔を真っ赤にしながら言った。

「本当？」

と涙目で言う。

「本当だよ」

「なら…キスして」

「そ、それは…」

口籠る。

「じゃあ、嘘なんだ」

とまた涙ぐむ、もう美菜の涙は見たくない。

僕は美菜の肩を抱き。

生まれて初めて女の子とキスをした。

## 第十二話

昨日はあんな事があつたせいで眠れなかった。

美菜の方はしつかり眠れた様で朝から上機嫌だ。

「ご機嫌だね、美菜」

「まあね」

学校に着くとみんなが見ても異常なほど上機嫌に見えたらしく皆、

「どうしたの？上機嫌だね」

と聞かれて

「それは白夜と私のひ・み・つ」

と意味ありげに答えていた。

そのため、この数週間で出来たらしい親衛隊とやらの白夜は連れて行かれた。

連れて行かれた先は屋上だった。

「つゝきゝうゝらくゝん（怒）」

「な、何？」

「お前は海とくつつくんだろ？え？なんで美菜さんにまで手出してんだ？あ？」

「手をだしたも何も僕は美菜とは幼馴染みだし、それに……」

美菜の事好きだからと言いかけて止める。

「それに？」

「……僕は美菜と一緒に住んでるから」

「……嘘……そうなの……」

……知らなかったらしい。

「手をだすだけにおさまらず、同棲だと！？……こいつは駄目だ、殺すのがこの世の為だ」

ジリジリと近付いて来る彼等の眼には、只僕を殺す！と言う思いだけがある。

「……………」

ヤバい、ヤバ過ぎる。

慌てて周りを見渡すが逃げれる隙間など無いほどの人が迫って来ている。

後ろはフェンス。

どうすんの？俺！！（某男優の声）

皆の手が僕に届く、というところで始業のチャイムが鳴った。

……………」

皆の手が止まる。

皆がまわりを見渡し、目で会話をする。

……………」

皆の手がまた動きだす。

「み、みんな、授業はちゃんと出ようよ、ね？美菜は真面目な人が好きって言ってたし…」

そこで皆の手が止まる。

そして皆急いで屋上から出て行った。

た、助かった。

げんなりとしながら教室に戻ると

「月裏遅刻だぞ！」

と先生に怒られた。

「すいません」

と言つて席に着こうとすると、椅子が無かった。

「……………」先生

「なんだ？」

「僕の椅子が無いんですけど…」

椅子が無くなっているなんて初めてだ。「誰か月裏の椅子の事知っている奴はいるか？」

と先生が聞く。

今朝僕を囲んでいた男子がクスクスと笑っている。

僕はそいつらの方に歩いて行き

「椅子隠したのはお前等？」

と聞く。

「さあ？俺等は知らないよ」

ニヤニヤといやらしい笑みで答える。

殴りたい衝動にかられたがなんとか堪えた。

「新しい椅子取って来ます」

と言って椅子を取りに行った。

椅子を取りに物置きになっている教室に向かっていると

「白夜」

と美菜が追って来た。

「何？」

「あのさ、さっきのつてもしかして私のせい？」  
と聞いて来る。

「え？違うよ、ただ少しね…」

と屋上でのを思い出し少し苦笑い。

「少し何？」

美菜は心配そうな目で見つめて来る。

そんな目で見られたら、心配事など話せるわけが無い。

「いや、何でもない」

と誤魔化して物置きになっている教室に向かった。

椅子を引きずらない様にしながら教室に戻ると僕の机に椅子が戻っていた。

誰が戻したかは海さんや涼杉さんが知っているだろうから問題はな  
いけど、持って来た椅子はどうしよう。

やはり返しに行くしかない。

しかし今返しに行くと絶対に机を隠される。

こうなったら…。

持って来た椅子を持って廊下に出る。  
そして教室の中が見える所に隠れる。

すると数人の男子が俺の机に近付き椅子を手に取った。  
同時に僕は動き出す。

「ちょっと何してんの？あんだ達！その椅子白夜のでしょ？まさかあんだ達が白夜の椅子隠してたの！？」

僕が文句を言うよりも早く美菜が怒鳴った。

「……み、美菜ちゃん……」

僕の椅子を持っていた奴等が同時に言う。

「あんだ達どういいうつもりよ！白夜があんだ達に何かした！？」  
美菜は本当に頭にきたらしく、怒鳴り続ける。

「大体何が、美菜ちゃん、つよあんだ達何かに名前と呼ばれたく無いつての！私を名前で読んでいい男はお父さんと白夜だけよ！」  
男子達の肩は少し震えている、泣いているのかも知れなかった。  
その中の一人がポツリと言う。

「……なんで？」

「なんで月裏なのさ！あんな奴の何処がいいんだよ！チビだし顔も良くないし、勉強だってスポーツだって出来るってわけじゃない、なのになんであいつなんだよ！」

と叫び美菜を睨む。

「あんだには関係ないわ」

と美菜は冷たく言った。

「おい、ちょっと待てよ！ちゃんと説明しろよ！」  
いきなり美菜に掴かかった。

## 第十三話

バシッという音が響く。

必死に伸ばした手が美菜に掴かろうとした手を掴んだ。

「…叶田<sup>かなだ</sup>！お前今何をしようとした！」

自分でも恐い位に冷たい声がでた。

「月裏！テメエには関係ねえ！どいてろ！」

僕の手を振り払おうと腕を振った。

「関係ない？関係なくねえよ！お前なんか美菜に触るな！」

振りほどかれそうになった手に力をこめる。

腕がミシッと嫌な音をたて、あまりの痛さに顔をしかめた。

「テメエ！」

次の瞬間僕は叶田に頬を殴られた。

僕は机をなぎ倒して床に転がった。

「きゃー！」

女子が悲鳴をあげる。

僕は殴られた頬を押さえながら叶田を見る。

叶田は

「おい、テメエ殴られても何もしねえのかよ？」

と叫ぶ。

僕は喧嘩なんかして相手が怪我するのも嫌だし、停学にもなりたくない。

黙って何もしない僕を見てそいつは

「フン、そんなびりりで喧嘩弱くて美菜ちゃんの事守れんのかよ」と見下した様に言った。

僕は叶田に

「今美菜を守る為に割り込んだんだろうが、美菜には触れさせてないんだから守れてるだろ？少なくともお前からは」



と言いつ返した。

すると叶田は僕に近付き

「今からお前をブツ殺してから美菜ちゃんを殴って目を覚まさせる」  
と言いつて腕を振り上げる。

ドゴッ

と鈍い音がする。

「ガッ、……テメエ、月裏」

僕の拳が叶田の腹に入っていた。

美菜を殴ると言つ言葉に反射的に手がでた。

「やりやがったな！テメエ！」

叫んで叶田が腕を振り上げる。

バシッ

と肌を打つ音がする。

僕は殴られていない。

美菜が叶田の頬をビンタしたのだ。

騒がしかった教室が静かになる。

誰も口を開かず美菜を見つめる。

少しして美菜が口を開く

「……アンタ、なんで私が白夜を好きになつたかつて聞いたわね。  
教えてあげる」

と静かに言つた。

「まず第一に白夜は人に迷惑をかける事をしない、第二に自分に過  
剰なまでの自信を持ったない、第三に自分を飾らない、アンタ等み  
たいに女にもてる事しか考えてない奴等とは違う、第四に人を極力  
傷つけない、暴力にしても言葉にしても、まあ、そのせいで困つて  
る事もあるけどね」

と言いつてチラリと僕を見た。

「そしてこれが一番の理由で絶対的な事」  
と一回切つて僕を見る。

「白夜が白夜である、という事」

色々な意味が入った重いく強い思いの言葉が響く。

「はあ？意味わかんねえよ！月裏が月裏であるなんて当たり前だろ？そのどこが一番の理由なんだ？」

と意味の分らない馬鹿（叶田）は叫ぶ。

「……アンタ馬鹿ね……」

美菜が叶田を哀れそうな眼で見る。

「つまり白夜が幼馴染みであつたり、優しい人間であつたり、嫌いな部分が優柔不断って事も全て白夜を好きになる理由なの」

「？」

いまいち理解出来ないと言う顔の奴が数人いた。

そんなのだから彼女の一人もできないのだ。

「例えば私がもう一人いて貴方の幼馴染みだったら同じ私でも白夜を好きになら無いって事」

「幼馴染みになったとかそんなの偶然でしか無いじゃねえか」

「そついう、偶然って言うのが、運命って言うのよ」

運命と言う言葉にたじろぐ。

「まあ、私が言った事も貴方達みたいに外見だけで好きになつて人間じゃ、わからないかもね」

と言って哀れそうに叶田達を見る。

叶田達はもう何も言わなかった。

「美菜さん」

昼休みが半分位過ぎた時海が美菜に話しかける。

「アンタ、誰？」

「私、同じクラスの海美咲って言うんだけど、知らない？」

海と言う名前が白夜の言った女の名前と一致した。

海の全身をジロジロと見て

「あんたが海さんね…さっきの馬鹿共とは違ってちゃんと私の話が分かる奴の様ね」

と言った。

「え？」

「何でって顔してるわね、顔を見れば話分かる奴か分からない奴かぐらいわかるわ」

馬鹿にしないでと言う顔で言う。

「それで何の用？」

と言って海を見る。

海は拳を握り

「わ、私、負けないから」

と言った。

「…そう、そしたら友達にならない？」

「え？」

「同じ人を好きになった者同士仲良く、時にライバルって事でいい？」

と美菜はにこやかに言った。

「うん」

海は嬉しそうにそう答えた。

同時刻、白夜は空に校舎裏に呼び出されていた。

白夜が屋上に行くところにはもう空がいた。

白夜が入って来るなり空は

「もしかして月裏君、天上さんと付き合ってるの？」  
と聞いた。

僕は

「いや、付き合っていないよ、付き合っていないんだけどね…」  
と口ごもる。

「付き合っていないけど、何？」

「…キスしちゃったんだ」

「え？キ、キス？」

「う、うん」

と言つて少し身構える、昨日の海さんへの対抗心を見る限り、目茶苦茶嫉妬深そうだったから、いきなりキスをされる可能性があった。しかし空さんは意外にも何もしてこなかった。

「何身構えてるの？もしかして、キスされると思った？」とおかしそうに言う。

「べ、別に」

恥ずかしくなつて少し冷たい言い方になった。

「ふ〜ん、本当にしたくないの？キス」

ニヤニヤと笑う。

完全にからかわれている。

「ごめん、本当は目茶苦茶したいんだ」

「とか言わないの？」

涼杉さん、それはちよつと痛く無いですか？

「本当にいいの？」

「え？」

「本当にしたくないの？キス」

そんないきなり真面目な顔しなくてもいいだろう。

仕方なしに僕は

「涼杉さんとキスしたくないわけじゃないけど、今は、まだそこまですていい関係にはなつて無い…と思う」  
と言った。

「ふ〜ん、じゃあ、天上さんはそこまでの関係になつてゐるって事？」  
と不機嫌そうな顔で言った。

「い、いや、どうなんだろうね、僕も分からない」  
何故か目を見れない。

「……そっかそっか、分からない……か」

と言って屋上から出て行った。

「分からない……か」

自分でも繰り返してみる。

本当に分からないのかな？

## 第十四話

新学期が始まってから一カ月と半月がたった。

今さらになつて先生が委員決めを始めた。

「まず委員長を決めたい、誰か立候補しないか？」

委員長は色々と面倒なので余程の物好きでないと立候補したりは

「私立候補します」

……いた。

余程の物好きの真面目キヤラ、涼杉空がいた。

「涼杉か…まあ、お前なら問題ないだろう」

と先生は言つて委員長、と書かれた所の下に涼杉と書いた。

「えゝ、次は副委員長を決めたい、誰か」立候補する奴はいるか？

つと言ひ切る前に

「はい、俺副委員長やります！」

「抜け駆けすんな！俺がやるんだよ！」

「ふざけんな！俺が」

俺が、俺がと僕と秋羅以外の男子が立候補した。

秋羅はあくまでも海さん一筋つて事なのだろう。

「五月蠅い！静かにしろ！」

先生が一喝する。

すると渋々とだが静かになった。

先生は

「涼杉、お前が委員長だからこの中からお前が好きな奴を副委員長に指名しろ」

と言つた。

涼杉さんは

「じゃあ、月裏君にお願いします」

キッパリとそう言つた。

言い切つた、言い切りましたよ。

立候補していた男子の目が殺意を放ち僕を睨む。

男子達の目はなんでお前なんだよ！と言っている。

この前の屋上の時の事を思い出す。

……………やばい。

「あ、あの、僕はやりたくない」

断ろうとした僕の声をかき消したのは

「月裏なら他の奴よりマシだろう、よし、副委員長は月裏に決定だ」と言う先生の声だった。

「よろしくね、月裏君」

と涼杉さんはにこやかに言った。

僕は美菜の時と同じくまた屋上に拉致られる（皆屋上好きだな）。

「つゝきゝうゝらくゝん！！！！！！」

美菜の時よりも人数が多い。

てか美菜の時にいた奴もいた（美菜一筋じゃねえのかよ！）。

「なんでまたお前？何？ここはギャルゲの世界か？お前はなんかの主人公か！？」

リーダー格の奴が叫ぶ。

「意味分かんないよ、ギャルゲって何さ？」

「恋愛シュミレーションゲームの事だよ」

と誰かが言った。

「ギャルゲの説明なんてどうでもいい、問題は貴様だ！」

ピツと僕を指差す。

「貴様はこの学校のアイドル三人をはべらせてプチハーレムでも作る気か！？」

「別に僕はそんな事がしたいんじゃない」

「じゃあ、どんな事がしたいんだ？」

誰かがそう聞いた瞬間、僕は我慢の限界だった。

「別に僕は何かをしたくて涼杉さん達と一緒にいるんじゃない！」と怒鳴った。

続けて

「お前等この間美菜が言った事全然分かってないだろ！人に何かしたいって理由で近づく奴ほど嫌な奴はいないよ！」  
と言った。

周りの皆は少し面食らっている様だった。

「退けよ！」

と言うだけで人が割れた。

僕は屋上を出て行った。

「白夜」

屋上を下りて来た所で秋羅が僕を呼んだ。

「秋羅、今僕凄く機嫌が悪いんだけど」

と刺のある言い方をする。

「いいから聞けよ」

「だから」

後で、と言おうとした時、

「いいから聞け！」

と秋羅は怒鳴った。

「……」

「お前の海さんや涼杉さんや天上さんへの気持ちはさっき聞かせて貰ったよ」

聞かれていたとわかると少し恥ずかしい。

「でも、お前も中途半端だ。俺が好きなのは海さんだけだ、お前みたいに誰が好きか分からないとかぬかしてる奴に海さんは任せられない」

秋羅は僕をジッと見つめる。

「勝負だ白夜！お前が誰が好きか決まるのが先か俺が海さんを惚れさせるのが先か」

と言った秋羅は心底楽しそうに去って行った。

「そっか、秋羅、海さんの事本気なんだ……」



僕は唯々立っていた。

だから僕は屋上に続く階段の下に誰かいるのに気がつかなかった。

「海さんを手にいれるのは月裏でも鹿賀里木でもない、この俺だ」  
そんな事を言っている奴がいる事に…。

「おはよう」

秋羅が宣戦布告した翌朝、通学路で海さんに会った。

「あ、お、おはよう、海さん」

僕は美菜の顔色を見ながら言った。

意外にも美菜は

「おはよう、海」

と普通に挨拶した。

「あれ？誰の名前も覚えて無いんじゃないかなかったわけ？」

「こないだ友達になったのよ、ね、海」

と海さんに同意を求める。

海さんは

「ええ、美菜さん」

と笑いながら答える。

それに対し美奈は

「まあ、ある一点においてはライバルだけだね」

とボソリと言った。

「え？何？」

と僕が聞くと

「なんでもない」

と答えた。

教室について席に着く。

ガラスとドアが開いて誰か入ってきた。

誰かは誰かを探す様にキョロキョロと周りを見回す。

そして海さんを見つけると直ぐに海さんに向かって行った。

海さんの手を取り

「どうも、海さん」

と言った。

周りの女子が

「あれって兜叉頭さんじゃない？」

「なんで海さんの手を取ってるわけ！許せない！」

と言った。

とさがしら

まだら

兜叉頭 真多羅成績優秀、スポーツ万能、顔も格好いいと三拍子そろった奴で、まあ、当然モテる。

告白された回数は涼杉さん同じ位だろう。

つまり涼杉さんと同じ位僕の学校では有名なのだ、女から女へと流れていく優柔不断さも有名な理由かも知れないが……。まあ、そんなモテる彼が海さんに直々に会いに来たとなつては騒ぎだすのも分かんなくない。

兜叉頭はいきなり手を取られてキョトンとしている海さんに

「俺は貴女が好きです」

と言った。

## 第十五話

「俺は海さんが好きです」

皆のいる前で堂々と告白した。

「兜叉頭さんが告白した」

「海さんに告白した」

皆が啞然としながら言う。

しばらくして

「う、海さん、兜叉頭さんからの告白なんて断ったら勿体ないよ」

「そうだよ、こんなにいい人なかないよ！」

と女子が海さんに言い始めた。

「え、えつと、その…私は」

周りの女子にうるたえる海さん。

こうなると分かっていたようにニヤリと兜叉頭が笑う。

少ししてニヤけた顔を真剣な顔に戻して

「どうでしょうか？海さん」

と問い掛ける。

「もちろんOKだよな？海さん」

「ほら、兜叉頭さんも返事待ってるよ、早く早く」

と海さんをせかす。

海さんは

「えつと私はですね…」

となんとか断ろうとした所に

「五月蠅いんだよ、馬鹿共！」

と不意に誰か叫んだ。

「鹿賀里木君？」

叫んだのは秋羅だった。

「さっきから聞いてりゃあ馬鹿丸出しな事ばっか言いやがって」

「五月蠅いのはどっちよ！人の事馬鹿馬鹿って言うて」

「馬鹿だから馬鹿って言うてんだよ！この馬鹿共！」

「私達のどこが馬鹿なのよ」

「勿体ないとか勝手にOKだね、とか言ってる所が馬鹿ぽいんだよ、海さんの気持ちをお前等が勝手に決めんな！お前等は超能力でももってるのか！そいつの気持ちを決めていいのはそいつだけなんだよ！」

「決め付けてなんて無いわよ！兜叉頭さんに告白されてるなんて普通ならしないわよ！」

「普通？普通ってなんだ？そんなもんどつかの馬鹿が言いだした妄言だ！普通なんてもんはその馬鹿が決め付けて作った基準でしかねえ！んなもんに縛られてたら一生そいつの思った通りの生き方しかできねえ！」

僕は今叫んでいる親友が凄く格好良く見える。

「秋羅」

ただ僕はそう呟いた。

「普通なんて言葉に拘束されてたらツマらねえ一生だぜ！天才には変人が多いって言うがそうじゃねえ、普通って言う枠から外れた物の見方をしてるから新しい発見があるし、変人とも呼ばれるだけなんだよ！」

と秋羅は叫んだ。

「つと話がずれたな、それで？海さんはこいつの告白に対してなんて答えるんだ？」

「わ、私は……」

一拍おいて海さんは

「私、他に好きな人がいるんです。兜叉頭さんには悪いけど……ごめんなさい」

と一瞬僕をみて兜叉頭に頭を下げた。

大体はここで終わるのだが兜叉頭、この男は違った。

「ちよ、調子にのるなあ！この俺が、この俺が告白したのにふるだど！？この顔、この頭、この身体、この神に愛された俺を、この世

の中に数億人いる女の中の一人でしかない女が！この俺をフリユツ」

兜叉頭の言葉は最後まで続かなかった。  
僕が兜叉頭の口を押さえ付けたからだ。

「調子にのってんのはお前だろ？お前だつてこの世の中にいる数億人の中の一人なんだよ、神になんて愛されてねえただの人間なんだよ」

と言う僕に対して兜叉頭は無理矢理喋る。

「馬鹿め、神に愛されてなければこんなに才能あふれる人間などいる筈が無い！」

などと言い切った。

「……いいか？よく聞け勘違いの妄想野郎、神に愛されたら人間なんてちっぽけなもののわけねえだろ？神に愛された奴は人間なんてちっぽけなものにならずに、天使とかになるんじゃないのか？」

「貴様には関係ないだろ！この俺の素晴らしさが分からない奴は黙つてろ！」

「確かに関係無いかもしれない、けどな、嫌がつてる女の子を放つては置けないな」

「嫌がつてるだと！俺はただ告白しただけだろ！」

「告つてフラれてで終わつてねえから言つてんだよ、意味分かんない風に逆ギレすんなよ」

淡々と言い返す僕に次第に我慢出来なくなつて来たらしい兜叉頭は拳を振り上げて

「う、五月蠅い！」

と言う声と共に振り落とした拳を僕は手のひらで受け止める。

「……全く、なんでこの学校はこんなに血の気の多い奴が多いかね、それにしても可哀想な奴だな。言葉で勝てないと分かれば今度は暴力か？弱いなお前」

「何だと？この俺にお前みたいなチビが喧嘩で勝てるんでも？」

兜叉頭は如何にもキレてますと言う顔で僕を見る。

「別に喧嘩が弱いつて意味じゃねえよ、女子が味方になるのを予想

して皆がいる所でわざわざ告白したり、断られたのに潔く引きもしない、そういう部分が弱いつて言ってるんだよ」

兜叉頭は苛立った様に

「だから俺の何処が弱いんだよ!」

と叫んだ。

僕は

「お前は心が弱いんだよ」

とだけ言った。

「心だと?」

「そう、心だよ、何故フラれた原因が自分ではなく相手だと思う、そんなんは自分の弱さを受け止められない心の弱い奴がやる事なんだよ、それに心の強い奴ならここは潔くひいてよりいい男になって惚れさせるって考えると思うぞ」

と僕は言つて最後にもっとも、これはある人からの受け売りだけになつと付け足した。

「……………」

兜叉頭は何も言わなくなつて、そのままクラスから出て行つてしまった。

その日以来兜叉頭の人気は一気に無くなった。

それはそうだろう、人を馬鹿にしている奴に人気など出る筈が無いのだから。

## 第十六話（前書き）

読んで頂いている皆様、文化祭などで更新が遅れて大変申し訳ありませんでした。

今度文化祭で発表した作品も投稿させて頂きますのでそちらも読んで頂けると嬉しいです。

## 第十六話

兜又頭が海さんに告白してからもう二週間たった。

僕達が二年になってから初めてのテストが近付いていた。

「この問題なんだけどどうやってやるの？」

と言う声が聞こえて来る。

訊かれ答えるのはやはり涼杉さんだ。

それに便乗する様に

「涼杉さん、ちょっとテスト範囲で分かんない所があつてさ、今日良かったら、放課後ファミレスとかで教えてくれないかな？飲み物とか奢るからさ」

と言つて二人つきりになろうとする奴も多数いる。

そういう輩に対し涼杉さんは

「どこが分からないの？教えられる範囲で今教えるわ、放課後は寄り道せずに帰宅するのが校則だから駄目」

と上手くあしらっている様だ。

涼杉さんは帰ってから猛勉強している事だろう。

そういえば最近海さんと美奈が仲がいい様で家で勉強会をしている。

勉強会は大抵話たり、遊んだりになったりするのだが美奈達は猛勉強している様だ。

そんな状況の美奈の部屋に近付けない僕は自室でそれなりに頑張っている。

放課後になり、帰ろうとすると後ろから

「月裏君」

と呼ばれた。

振り返るとそこには涼杉さんがいた。

「何？涼杉さん」

と聞くと



「月曜からテストでしょ？勉強はしてるのかなって思って  
と言った。」

「どうやら僕がしっかり勉強しているか気になったらしい。  
だから」

「まあまあしてるよ」

と答えた。

すると涼杉さんは

「まあまあ？そんなんじゃ駄目じゃない！まあまあの成績で生きて  
行けるほど世の中は甘くないのよ」

と言った。

続けて

「だったら私が勉強教えるから、よ、良かったら私の家にこない？」  
と言った。

「……………」

さっきの休み時間に自分で言ってた寄り道は駄目ってのはどうなっ  
た。

涼杉さんは

「やっぱり、駄目？」

と涙目になって言う。

「うわ、卑怯だ、そんな泣きそうな顔で言われたら、断れない。」

「……いいよ」

「え？」

涼杉さんは少し信じられない、と言う顔をしている。

「だから、いいよ。涼杉さんの家行くよ」

「本当に？」

「本当に」

「じゃ、じゃあ、帰る用意して来るからそこで待っててね」  
と言って嬉しそうに自分の机に走って行った。

涼杉さんの家は僕の家からけっこう遠かった。

「ここが私の家」

と言われて、見た家は如何にもお金がありそうな家だった。  
ドアを開けて

「さあ、どうぞ」

と言われたので家に上がった。

「空、遅かったな」

リビングに入ると直ぐに声がした。

声のした方を向くと

「んん？誰だそいつ、お前が男家に上げてるとこ初めて見たぜ」  
と言って僕を見ている背の高い男性が立っていた。

「荒夜兄、来てたの！？」

涼杉さんは苦い顔をしていた。

「おい、お前！空の何なんだ？まさか彼氏とか言わないよな？」

荒夜と呼ばれた男は涼杉さんを無視して僕に詰め寄る。

「僕は涼杉さんの友人です、貴方こそ涼杉さんの何なんですか？」  
と聞き返した。

「あのね、月裏君、この人は隣りに住んでる」

と説明を始めた涼杉さんを遮って

「志摩紫荒夜だ」

と自分で名乗った。

荒夜さんは単身赴任した涼杉さんのお父さんについて行った涼杉さんのお母さんに涼杉さんの事を頼まれ、時々、と言うかほぼ毎日様子を見に来てるらしい。

荒夜さんは手をさしだした。

僕はその手を握った。

荒夜さんはニコリツと笑って

「空の事よろしくな」

と目一杯の力で握ってくる。

僕もお返しにと思いつ切り握る。

ふふふ、と怪しい笑いをしながら睨み合う。

睨み合いは

「何時まで握手してんの？」

と涼杉さんが言うまで終わらなかった。

あの握手の後、荒夜さんは涼杉さんに勉強の邪魔だからと半強制的に帰らせられた。

二人つきりだから、といい雰囲気になる…はずもなく、

「そこは、Xに代入して…」

などと普通に勉強を教わっている。

別に色気のある事をしているわけでも無いのにやたら心臓がドキンツと鳴く。

確かに涼杉さんからシャンプーだか石鹸だか香水だか分からないが、良い匂いがする。

だけど匂いだけでこんなにドキドキしているのはなんか変態ばい。とか言いつつも微妙に涼杉さんに擦り寄って行ってる。

気分を紛らわす様に

「な、何か暑いね」

と話かけてみる。

涼杉さんは

「そう？私はそうでも無いけど、窓開けようか？」  
と言って立ち上がる。

涼杉さんが立つたのを見て僕も慌てて立ち上がる。

「ああ、いいよ、僕が開ける」

と手を窓に伸ばす。

同時に伸ばした手が互いの手に触れる。

「

」

声にならない声が出て二人共手を引っ込める。

手を胸元で抱き締めた姿勢で自然と見つめあう。

そしてどちらともなく二人して笑い始める。

「何意識してんだろうね」

と僕が笑いかけると

「ね、たかが手が触れたぐらいでね」

と笑い返してくれた。

笑いが止むまで待つて

「勉強しよつか」

と言った。

「月裏君」

時計の針が十八時四十六分を指した時、突然涼杉さんに呼ばれた。

「な、何？」

いきなりの事だったので少しびっくりしながら訊く。

涼杉さんはド緊張といった感じで

「もう晩御飯の時間だね」

と微妙に棒読み気味で言う。

「あ、そうだね、ごめん、こんなに遅くまで居座っちゃって、もう帰るから」

と言って荷物を片付け始めた僕を見て涼杉さんは

「あ、や、違うの、あの、お腹空いて無いかなくなって思って」

と焦った感じでいて更に恥ずかしそうに言った。

「空いてるけど？」

と僕は質問の用途が分からず素直にそう答える。

それを聞いた涼杉さんは

「そ、それじゃあ、晩御飯ウチで食べてかない？」

と言った。

確か美奈は今日は海さんとファミレスで勉強すると言っていたので  
ご飯はいらないだろう。

そう考え

「うん、それじゃあ、ご馳走になるよ」

と言うと涼杉さんは嬉しそうに笑った。

## 第十七話

トントントンとリズムの良い包丁の音が聞こえる。  
あの後二人でリビングに下りた。

二人きりつで食事なんてカップルみたいで嬉しい、などと思いが  
らリビングのドアを開けると、何故か荒夜さんがソファに座ってい  
た。

リビングに入って来た僕達に気付いた荒夜さんは

「お？ やつと下りて来たか、腹減ったぞ、んで？ そっちの餓鬼はお  
帰りかい？」

とこちらを見ながら言った。

涼杉さんは首を横に振り

「月裏君はまだ帰らないよ、ウチで夕食食べて、その後また少し勉  
強するから」

と答えた。

荒夜さんなら『ああ！？ 食べてから帰る？』と怒りそうな物だったが  
「ふーん、そっか」

と意外にもどうでもよさそうな反応をした。

涼杉さんもこの反応は予想外だった様で少し驚いた顔をしてたまま  
で立っていたが、ご飯を作る為に台所に向かった。

いつまで立ったままにいるわけにもいかないのでテーブルを囲む家  
族の食事時用であろう三つのイスの内、最も荒夜さんから遠いイス  
に座った。

すると荒夜さんはソファから立ち上がり

「んなに、俺の近くに座りたくないか？」

と言って僕の真っ正面にあるイスに腰掛ける。

僕は

「別に」

と答えたが嘘だ。

そう答えた僕を見て、

「お前は空の事が好きなのか？」

と荒夜さんは言った。

「な！？そ、わ」

僕は動揺して何も答えられなかった。

さらに動揺している僕に

「俺は空の事が好きだ。別に顔がいいからじゃねえぞ？性格の方を見て空程の女はそうは居ねえ、俺が好きになるのに値する女だ」と荒夜さんは言った。

僕は暫く喋れなかった。

僕が涼杉さんを想う気持ちと荒夜さんが涼杉さんを想う気持ちは重みが違った。

荒夜さんは真剣に、僕は学園のアイドルに憧れているだけでファンのように、涼杉さんを想っている。

僕は意を決し

「僕は…僕は荒夜さんの様に『本気の好き』では無いと思います、でも、それでも僕が涼杉さんを好きと言う事に違いはありません」と言った。

荒夜さんは僕を見て

「俺の空を想う気持ちは誰にも負けない、俺よりも空の事を想っていない奴に空と付き合う資格があると思うか？」

と言った。

僕は

「大切なはその人の事がどれだけ好きかじゃなくて、その人にとってどれだけ好きな人かでしょ？ヌルイラブコメじゃ無いんだからそんなくだらない事言わないで下さいよ、ドラマの見過ぎですか？」

と言い返した。

フツと鼻で笑い、荒夜さんは

「その通りだ」

と言った。

続けて荒夜さんは

「例えどんなに好きでも、それをどう受け取るかはそいつ次第だ。猛烈にアタックしてくる奴をウザいと思うか、情熱的だと思うか、とどのつまり、気持ちを決めるのはそいつだ、誰でも無い自分自身、一から十まで全て自分で決める。人間てのはそういうもんだ」

と哲学者みたいな事を言った。

それを聞いた僕は

「そうですね、僕もそう思います」

と賛同した。

更に何か言おうと口を開いた荒夜さんは

「ご飯出来たよ、運ぶの手伝って」

と言っ涼杉さんの言葉で遮られた。

料理を運び終えて、三人そろって

「いただきます」

と言った。

涼杉さんが作ってくれた料理はかなり美味しそうだった。

何か視線を感じ顔を上げると涼杉さんが僕をじいつと見ていた。

何だろう？と思いつながら、料理を口に運ぶ。

料理を口に入れた瞬間

「美味しい」

と自然に口から出た。

それを聞いた涼杉さんは

「本当！？本当に美味しい？」

と身体を乗り出して訊いて来た。

涼杉さんの予想もしない行動に戸惑いながらも

「う、うん、美味しいよ、本当に」

と僕は笑って答えた。

涼杉さんはヨッシャー！と叫び出しそんな勢いでガッツポーズを

した。

「えっと…どうしたの？」

と僕は涼杉さんの行動が何時もの涼杉さんとかけ離れていたの思わず訪ねてしまった。すると涼杉さんは照れたのか顔を真っ赤にして「いや、ただ美味しいって言って貰えて嬉しかったから…」

と俯いて時々僕の方を上目遣いで見つめながら言った。

そんな涼杉さんの態度に僕も照れてしまい

「そ、そっか」

と顔を赤くした。

……………。

二人の間に沈黙がながれる。

黙っている間もチラチラと相手の様子を伺っている。

「いい雰囲気の所悪いんだが俺がいるのを忘れんなよ？」

いきなり荒夜さんが声を発した。

僕も涼杉さんも荒夜さんの事をすっかり忘れていたので驚いて椅子から転げ落ちそうになる。

「何も椅子から落ちるほど驚く事じゃないだろ、てか今の反応は少し傷付くぞ」

と荒夜さんは少し悲しそうな顔をして言った。

僕はイスに座り直して

「べ、別に忘れてないですよ」

と言ったもののそうでないのは明白だろう。

僕がそう言った後に暫し荒夜さんは黙っていたが、突然

「餓鬼」

と僕に話しかけてきた。

僕は

「僕は餓鬼って名前でも餓鬼って名字でもないです、僕は月裏白夜って言うんですよ」

と返した。

荒夜さんは



「そうだな、じゃあ月裏白夜君に聞くぜ？」と笑って言った。

すぐに続きを言うかと思っただがただ黙って僕を見る。

ようやく僕の返事を待っていると分かり

「どうぞ」

と続きを話すように促した。

荒夜さんはようやくか見たいな顔をして

「月裏白夜君、お前は空の事が好きなのか？」

と訊いてきた。

## 第十八話

「月裏白夜君、お前は空の事が好きなのか？」

荒夜さんはさっき答えた質問をわざわざ涼杉さんの前で繰り返した。僕は

「その質問にはさっき答えたじゃないですか」

と答えたがもう一度聞き返されるのは分かっていた。予想通り

「もう一度言つて欲しいんだよ、空のいる前で」

と荒夜さんは言った。

僕は迷った。

ここで中途半端な気持ちの僕が涼杉さんの事を好きだと言ったら、後々涼杉さんを辛い目にあわせてしまいかもしれない。

黙っていた僕に荒夜さんは

「俺は空の事が好きだ」

と躊躇いもなく言った。

「な！！」

と涼杉さんは驚きの声を上げ、

「冗談…だよね？荒夜兄」

と荒夜さんに確認する様に言う。すると荒夜さんは、

「いいや、冗談なんかじゃねえよ、分かってるんだろ、空？」

と涼杉さんに問い返す。

図星だったのか涼杉さんは気まずそうな顔で何も言わなかった。荒夜さんはやれやれ、と言った感じで頭を左右に振り

「んで、月裏白夜君、君は空の事が好きなのか？」

と再び僕に問いかける。

「僕は涼杉さんの事が好きです」

と僕は答えた。

そして

「でも、涼杉さん以外にも好きな人がいます」と続けた。

荒夜さんは

「空以外に他の好きな人がいるだって？そんなんで空が好きだなんてよく言えるな？」

と痛いところを突いてきた。

それでも僕は怯まず

「言えますよ、どの娘に対しても僕は本気ですから」と返す。

涼杉さんは自分の事が好きだと言われた喜びと他にも好きな人がいると言う嫉妬か悲しみの感情がごっちゃまぜになったのか曖昧な表情をしていた。

一方荒谷さんの方は

「やっぱ餓鬼って面白いな」

と笑っていた。

その笑みが気に入らなかったが僕は何も言わなかった。

家に帰り、玄関を開けた途端

「お帰り」

と不機嫌そうな美奈が僕を待っていた。

僕が只今と言う前に

「随分遅かったわね」

と美奈は不機嫌そうな顔のまま言った。

まずい。

怒ってる。

そりゃあ、連絡もしないでこんな時間まで外にいたら当然かも知れないが……

連絡いれればよかったな。

「どこで何してたのこんな時間まで」

美菜は笑顔で聞いてくるがその笑みがひきつっててかなり怖い。

「いや、その……」

何か言おうとして言い淀む。

嘘をつこうと思えばつける。

秋羅と一緒に勉強していた、と言えはいいだけだ。

「実は……涼杉さんの家で勉強教えて貰ってたんだ」

僕は何故か嘘をつかなかった。

別に美奈だから、と言うわけではない。

ただ自分を真剣に想ってくれる相手に嘘をつきたく無かった。

自分の誰に向いてるか分からない気持ちの答えを待ち、時にはアップ  
ローチしてくる娘を騙す事は出来なかった。

どんなに怒られるとわかっていても……

「そう、またあの女と一緒にいたの」

美奈の声は怒りからか震えていた。

「その、ゴメン、連絡ぐらいつればよかったよね」

僕が出来るのは美奈にどれだけ怒られようともそれに誤り続けるだけだ。

美奈が拳を握ったが見えた。

叩かれる、そう思ったのに何時までも拳はとんでこなかった。

「美奈？」

僕は美奈の顔を覗きこんだ。

「っ！」

衝撃だった。

美奈は泣いていた。

過去に美奈が泣いた所など見た事の無かった、家では泣いていたかも知れないが、少なくとも僕が知る限りでは初めてだった。

それだけに衝撃だった。

有り得ない事に出くわした気分になる。

有り得ないはずが無いのに。

人間ならば誰でも涙するときはある。

でも、僕は美菜が僕の前で泣くなんて思いもしなかった。

「……っあ！」

静かに泣いていた美菜が驚きの声を上げる。

「ごめん、ごめん美菜」

僕は美菜を抱き締めていた。

力の限り、何の気遣いも、何の遠慮もなく、全力で。

……僕は馬鹿だ。

美菜だって、何時も強いわけじゃない。

どこかで弱さを持っている人間なんだ。

それを……

「ごめんね、美菜」

僕はもう一度美菜に謝る。

「痛い」

美菜はポツリと言った。

あれ？ 僕全力で抱き締めたまんま？

「ご、ごめん！」

慌てて美菜を離す。

美菜は暫く痛そうに腕をさすっていたが、

「ねえ、もう一回抱き締めて」

と言ってきた。

「え！ さっきは何て言うか全然意識してなくて、だから、その……」

と僕はさっき美菜を抱き締めた時の事を思い出し動揺する。

「抱き締めてくれないと許さないんだから」

美菜は拗ねたように言う。

僕は一步ずつ美菜に近づく。

あと三步、あと二歩、あと一歩。

とうとう、美奈の前に立つ。

緊張でガチガチに身体を固まらせる。

ぎこちない動きで美奈の背に腕を回す。

ギュッと美菜を僕の腕の中に抱く。

……ヤバい、これはヤバいよ、うん。

心臓が飛び出す程になっている。

美菜にも僕のドキドキは伝わっているだろう。

僕にも美奈の息遣いや心臓の音が聞こえてくる。

「ねえ、白夜」

美菜が突然僕の背に腕を回す。

「え……え!？」

困惑する僕。

美菜は何か言おうとして、

「………何でもない」

と言っのをやめ、僕の胸に顔を埋めた。

結局僕達は暫く抱き合っていた。

## 第十九話

朝が来た。

もう朝とは、夜が明けるのは早いものだ。

日が登り始め部屋の中に光が射し込む。

その光が僕の顔にあたる。

酷い顔だろう。

結局あの後、暫くして美菜を放し、風呂に入って寝ようとした。

しかし、ベッドに寝そべると何故か美菜と抱き合っているシーンがプレイバックしてきた。

そのせいで全く寝付けず朝まで悶えていた、と言うわけだ。  
時間を確認するとまだ五時半位だ。

学校に遅刻しない様に出るには八時位に出れば間に合う。

まだ五時半、今から寝ればギリギリ二時間は眠れるだろう。  
無理にでも寝なければ、そう思い布団を頭をまで被る。

『ねえ、白夜』

途端、美菜の声が再生される。

「ふおおおお」

ベッドの上で悶える。

やっぱり、眠れない！

「お早う」

美菜と登校しているとクラスの男子が挨拶してくれた。

「……お早う」

僕は寝不足のせいで殆ど声も出せず、囁く様になった。

「お早う！」

僕に引き替え美菜は何時も以上の明るさでクラスメート達を驚かせていた。

中には元気すぎる美菜に後退りした人もいた。

「あれはどういう事かな？」

昨日はいい感じだった涼杉さんはどこか機嫌が悪く、僕に笑っているが怒っていると言う器用な顔をしてきた。

「……………」

海さんは海さんで何も言わないけど悲しそうな顔をしている。

僕が悪いのか？

などと考えていると視界が歪み、誰かの悲鳴が聞こえた気がする。

「目え覚めた？」

気が付くと目の前に物凄い美人がいた。

「うおー!!」

驚き、後退り。

どんな男でもいきなり超美人が目の前にいたらデレデレするよりも先に驚くだろう。

…………… 多分。

「結構なご挨拶じゃないか、この私を見て退くとは」

超美人、もとい保険医の華瀬津<sup>かせつ</sup> 琴霊<sup>ことたま</sup>先生が僕に言った。

まゝ先生が僕を睨む。

睨んでても綺麗だな…………… じゃなくて！

「僕何故ここに？」

ベッドから降り、少しフラフラする足元を怪訝に思いながら尋ねる。

「覚えてないのか？ 月裏、あんた教室で倒れてここに鹿賀里木が運んできたのよ、おまけが三人いたけど」

とニヤニヤしながら僕が運ばれてきた経緯を説明してくれた。

三人って言う和美菜に涼杉さん、それと海さんかな？

そんなことを考えていると華瀬津先生は倒れた原因を教えてくれた。原因は寝不足だと言う。

「夜、三人が寝かせてくれなかったのかい？」

と華瀬津先生は再び厭らしく笑う。



寝れなかったのは美奈のせいだけど、なんとなく言わない方がいい気がしたので何も言わなかった。

僕の勘は結構当たるのだ。

僕が何も答えないのを見て、

「さて……月裏、もう大丈夫だろう？教室に戻りなさい」

授業を受ける様に言われた。

「……大丈夫だった!？」

僕が教室に戻ると授業中にも関わらず、美菜、涼杉さん、海さんの三人が声を揃えて聞いてくる。

そんなに心配しなくてもな。

などと思いながら、

「うん、大丈夫だよ、ただの寝不足らしいから」

と倒れた原因を説明した。

すると三人は、

「……よかった」

とまたも声をあわせて言った。

秋羅も何も言わなかったがホッとした様だった。

「保健室まで運んでくれたって？ありがとな」

僕は秋羅が保健室に連れて行ってくれた事にお礼を言った。

秋羅は

「気にすんな、親友助けんのは当たり前だろ？」

と言ってくれた。

正直、臭いなと思うけど秋羅はやっぱ格好いいなと思う。

僕にはない格好よさを持つ親友を羨ましそうに見ていた。

家に帰ると速攻でベッドにダイブ。

「眠い」

授業中よく耐えたものだと思う。

自分で自分を褒めてやりたかった。

ノートはまともに取れていない。  
今日中に美菜に写させて貰おう。  
とりあえず、今は眠ろ。

「起きて白夜」

美奈の声で目が覚める。

気分がすっきりしていたので結構寝たことが分かる。  
時計を確認すると案の定もう七時過ぎだった。  
となると三時間位は眠っていた事になる。

「白夜、もうご飯できてるよ」

美菜はさっきまで料理をしてましたと言わんばかりにエプロンを着ていた。

やべ、可愛い……………じゃなくて！

なんか最近ヤバいな僕。

「分かった、直ぐ行く」

自分の最近のヤバさに落ち込みながらもそう答えた。

「ごちそうさま」

美菜の作ってくれた手料理を全て平らげてから挨拶する。

食器を片付けると、部屋に行き、テスト勉強を始める。

そこへ、

「白夜、私も一緒に勉強してもいい？」

と美奈がドアから顔だけを出し尋ねる。

もしかして、涼杉さんに対抗しているつもりかも知れない。

そうなのだとしたら断ると、『なんであの女とは勉強出来て私とは出来ないのよ！』とキレそうだ。

それに美菜も涼杉さんに負けず劣らずの成績らしい。

勉強を教わるには申し分ない。

「いいよ」

僕はそう答えた。

美菜は部屋に入って着て僕の隣に座った。

## 第二十話

隣に座った美菜はお風呂上がりのせいかい匂いがした。否、隣に座ったせいだろう。

五月病が流行るこの季節。

今年は異常気象なのか異様に暑い。

僕はエコの為にクーラーを使わずに窓を開けていた。

そこから入ってくる風が美菜の匂いを僕の元に運ぶ。

せめて向かい側なら僕が美菜の匂いを気にする事はなかっただろう。昨日の事を思い出す。

涼杉さんのベッドの匂いも嗅いだが本人から嗅いだ訳じゃない。

しかつり感じた美菜の感触がリプレイされ、心臓が心拍数を上げる。

「ねえ、白夜」

美菜はほんのりと上気した顔で言う。

色っぽい美菜に顔を向けられると邪な思いが頭を過る。

このまま美菜を自分の物にしたい。そんな黒い感情を押し留め

「何？」

と尋ねる。

美菜は

「私は白夜になら何されてもいいよ」

と言つて僕の肩に頭をのせる。

黒い感情が再び、更に大きくなり僕を襲う。

「美菜！」

もう駄目だった。

我慢出来ない。

「きゃっ！！」

僕は悲鳴を無視して美菜を押し倒し覆い被さる。

驚いた顔をしている美菜に顔を近づけていく。

バクバクと心臓がなっているのが耳に響く。それでもゆっくりと少

しずつ顔を、唇を美菜に近づける。

唇が重なる、と言う瞬間に涼杉さんと海さんの顔が浮かぶ。

僕の唇は美菜の唇に当たるか当たらないかぐらいの所で止まった。

「……ごめん」

僕は謝りながら美菜の上からどく。

美菜は暫く起き上がらなかった。

余程驚いたのか、それとも……

「全くもう」

そう言つてようやく美菜は起き上がった。

「本当に何されても良かったんだよ？ 白夜なら」

美菜は照れ隠しなのか少し笑いながら言う。

「ごめん、僕……暴走しちゃって」

暴走どころではない今は明らかに強姦だろう。

「全くもう……」

美菜はもう一度そう言った。

襲った事に対してなのかそれとも襲わなかった事になのかわからな  
いが、僕はもう一度頭を下げた。

「はあ………」

大きな溜め息を吐きながらベッドに俯けになり考える。

僕はいつたい、誰の事が好きなんだろう。

このままズルズルと流されてあつちに来たりこつちに来たりしてい  
ては美菜や涼杉さんや海さんにも失礼だろう。

結局僕が優柔不断なのが悪いのだが、一人一人魅力が違う分比べる  
のが困難だ。

明日秋羅に相談してみよう。

「と言うわけなんだよ」

僕は学校に着くとさっそく秋羅に相談した。

「羨ましい悩みだな」

と秋羅は恨み言を言ってきた。

が、直ぐに

「まあ、話を聞く限りだと天上さんの事が好きっぽく聞こえるけどお前がそう思っていない以上違うのかもな」

とまともに意見してくれる。

「美奈は子供の頃から好きだったから年期があるんだよ」

と僕は言った。

「恋愛に年期なんか関係ないだろ？」

秋羅は直ぐにそう返してきた。

「いや、でも、好きでいた年月つてのは結構デカイだろ？例えば秋羅が海さん好きになってもう一年だろ？その海さんと昨日好きになったやつがいたとして、どっちが好きかなんていわれたら海さんだろ？」

と僕が言うと

「俺は海さん一筋だ、他に好きな人などできん！」

と秋羅は言い切った。

そんな秋羅を僕はやっぱり格好いいと思う。

こんなに一途な言葉を嘘以外に使える奴を僕は秋羅以外見たことがない。

優柔不断な僕とは大違いだ。

「秋羅ならそうかもね」

と僕は秋羅を尊敬しつつ言った。

秋羅はフツと笑った。

そして

「お前はお前なりの答えをだせ、自分の気持ちに正直になれよ。世間体とか普通だとか気にしないでいいから自分がしたいようにしろよ」

と秋羅は言った。

「自分のしたいように……か」

僕はその言葉を心の中でもう一度繰り返した。

僕は結局のところ誰が好きなのだろうか？

涼杉さん？海さん？それとも美奈？

一人一人の顔を思い浮かべる。

誰が好きかと言われると困ってしまう。

三人が三人とも同じ位に好きなのだ。

優劣など無く完璧なまでに同じなのだ。

だから、だから僕は……………

僕は三人を三人共呼び出した。

「話して？」

涼杉さんが代表して尋ねてくる。

「うん……僕、誰が好きなのか考えたんだ。美奈なのか海さんなのか、それとも涼杉さんなのか……」

大体のことは予想外ついているのだろう。

三人とも大した反応もせず、僕の話を聞いている。

「正直、すごく悩んだ。本当にこの答えでいいのか？こんな答えを美奈達に伝えられるのか、って」

僕は緊張でバクバクとなる心臓の音を聞きながら言う。

「だけど、この気持ちを伝えないといけない、そうしないと失礼だと思ったから」

僕は膝をつき、頭を下げる。

「ごめん！僕、三人とも同じ位に好きなんだ！僕が誰が特定の人を好きになるまで待ってて欲しいんだ」

と伝えた。

僕は頭を上げない。

彼女達の言葉を待つ。

「三人が好きなの？それとも三人が同じ位に好きなの？」

涼杉さんが尋ねてくる。

「僕は三人が好きだよ」

僕はなおも頭を下げたまま答える。  
すると、三人が何か話し合っている。  
そして、

「話し合った結果、月裏くんが誰か一人に決めるまで私達三人が恋人になると言うことになりました」  
と言った。

言われた瞬間僕は顔を上げた。

「いいわね？」

三人の笑顔がそこにはあった。

僕達が恋人になってもう1ヶ月経つ、三人とも役割を分担して僕につくしてくれる。

幸せだった。

僕の好きな三人が隣で笑っていてくれることがとても嬉しかった。  
放課後は三人と一緒に帰る。

その後、僕の家でみんなで遊ぶ。

それが日常化していた。

「あ、忘れ物した！」

僕が声をあげると三人は僕の方を見る。

「取ってきたら？」

と涼杉さん。

「一緒に行こうか？」

と海さん。

「みんなで行こうよ」

と美奈。

「いや、みんな先に帰ってて、すぐ追い付くから」

そう言っ僕は学校の方に走り出す。

三人は待っているつもりなのかそこに立ち止まっている。  
角を曲がり、真っ直ぐに進んで行く。



学校が見えてきたと思った瞬間。

鈍い音が僕の頭に響いた。

「

」

男が叫んでいるようだが何を言っているかわ聞き取れない。

何故僕が？と一瞬思ったが、それはすぐに察しがついた。

学校のアイドル達を三人とも彼女にしているのだ、学校の男子が僕を襲わないわけがない。

意識が遠のくのを僕は感じていた。

あの日以来、月裏白夜は行方不明になった。

桜が咲く季節になった。

しかし、月裏白夜の行方を知るものは誰もいない。

## 第二十話（後書き）

「僕の好きな人」はこれにて終わりとなります。

こんな作品をここまで読んで頂いた皆様、本当にありがとうございます。

続編となる「俺の好きな人」も見ただけだと嬉しいです。

その内もつと話をちゃんとした完全版を連載したいと思います。

今までありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8733c/>

---

僕の好きな人

2010年10月10日02時05分発行